

本日の箇所は、生まれたばかりのキリスト教会が初めてユダヤ教の「**最高法院**」(サンヘドリン)から問題視された3章1節から続いてきた記事の最後。

エルサレム神殿の入り口で物乞いをしていた40年来足が不自由だった男を、イエス・キリストの使徒ペトロとヨハネが「**ナザレの人、イエス・キリストの名によって**」救った。この奇跡に驚いて集まった民衆に対して、ペトロは、「あなたがたが殺したイエスを神は甦らせて天に坐せしめ、その「**イエスの名**」が信じるこの男を救ったのだ」、と言って、民衆に悔い改めを熱心に説き勧めていた。

こうしたペトロたちの説教に憤り、サンヘドリンはペトロとヨハネを捕え、「**何の權威によって、だれの名によってああいうことをしたのか**」と尋問した。ペトロは、「あなたがたの殺したナザレの人イエスを、神は復活させ、人間を救う唯一の救い主となされた。そのイエスの名が彼を救ったのだ、」と弁明をした。サンヘドリンは、ペトロたちが確かにイエスの弟子たちであったことを見定めていたし、現に、救われた生き証人が横に立っているのを見て、反論することができずに、使徒たちに「もう、これ以上イエスの名によって語ることをしてはいけない」と脅かし命じて、釈放した。ペトロたちは、脅かされても、自分たちがイエスから「**見たことや聞いたことを話さないでいられない**」と、はっきり宣教の継続を宣言して、サンヘドリンのもとから帰ってきた。

今日のところでは、「**仲間たちのところ**」に帰って来たペトロとヨハネの報告を受け、いかなる脅しにも屈せず「**大胆に御言葉を語るができるようにしてください**」と一同が熱心に祈ったことを記している。

23-24 節前半

「さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。これを聞いた人たちは心を一にし、神に向かって声をあげて言った。」

新共同訳では「**仲間**」という言葉が、ここまで数回出てきた(1:17、26、2:41、47)。しかし、今日のところは、原語は違う表現になっている。今日ところは、「**自分の**」(ιδίου、**イディウス**)という意味の言葉の複数形である。(因みに、それまでは「みなされる」とか「かぞえられる」という意味の動詞が使われている)。この言葉を使って、この後の24章23節では「**友人たち**」と訳している。

そこから考えると、この時には既にキリスト教会は1万人を超える人数となっていたわけで、その教会全体のことをここで言っているのではないだろう。むしろその中の、ペトロやヨハネの「**自分自身の者たち、友人たち**」という特定のグループ、例えば、十二使徒団や百二十人の弟子たち(1:15)などのことではないかと思われる。いずれにしても教会の中の特にペトロ、ヨハネの仲間内のことだと思われる。

この人たちが、ペトロの話聞いて「**心を一にして**」しかも「**声をあげて**」祈りを

ささげた。この「**心を一つにする**」というのは、今まで1章14節とか2章46節とかで既に出た「**同じ情熱をもって**」という意味の言葉 (ομοθυμαδόν、オモスマドン、with one accord)。

このようにしてささげられた祈禱が24節後半から30節までの言葉である。

この祈りは、先ず、呼びかけ(24節)、その次に、イエスに対する迫害(25-28節)、今の自分たちのための祈願(29-30節)という形になっている。

24節後半

「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。」

イスラエルの神ヤハウェが万物の創造者であることを言い表す時に、「**天と地の造り主**」というのが、普通の表現である。それにもう一つ「**海**」というのを加え、「**天と地と海と**」「**そこにあるすべてのものを造られた方**」という言い回しは、旧約・新約にそれぞれ2、3回ほどしか出て来ない珍しい表現(出20:11、詩146:6、使徒14:15、黙示14:7)。大体、イスラエルの人たちは聖地パレスチナの中に住んだが、地中海岸はペリシテが分捕っていた。だから、イスラエル人はパレスチナの山地で生活していたわけである。そんな彼らにとって「**海**」というのは、不慣れな不気味な統御しがたい領域であった。これら地理的なことを考えると、「**天と地**」とりわけあの「**海**」を創造なさった方というのは、ヤハフェなる神の全知全能を表現するのに適切な表現だったのではないかと思われる。

このように呼びかけてから、25節から28節にかけて、イエスに対する人間たちの空しい犯行と、それを通して神の御定めが実現したことを、これを告白する。

25-26節

「あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、諸国の民はむなしいことを企てるのか。地上の王たちはこぞって立ち上がり、指導者たちは団結して、主とそのメシアに逆らう。』」

これは詩編2編1節から2節のギリシア語訳の引用である。この詩編2編は、ここだけではなく、例えばこの後の13章33節でパウロがイエス・キリストを指す詩編として引用し、その他にも新約聖書の中ではヘブライ人への手紙とかヨハネの黙示録の中に2、3度引用されるメシア詩編である。

27節

「事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。」

「**事実**」(αληθείας、アレーセイアス)というのは、「**真実に基づいて、本当に**」という語り出しで、この詩編2編をイエス・キリストの出来事に当てはめようとしている。

「この都で」。詩編2編6節「**聖なる山シオンで、わたしは自ら、王を即位させた**」

という言葉が出てくるが、その「シオン」というのは「エルサレム」のことであるので、正に「この都」である。

「あなたが油注がれた」は、26 節最後にある「そのメシア」である。「聖なる僕」の「僕」は、前にも言及したが、「僕」という意味も、「自分の子ども」という意味もある言葉（παῖδά、パイダ）。詩編 2 編 7 節には、「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を生んだ」とある（使徒 13:33）。

「異邦人やイスラエルの民と一緒に」。この「異邦人」というのは、25 節に引用されている「異邦人」（ἔθνεσι、エスネシ）という言葉。それに対して、25 節の最後に「諸国の民」と訳されているのは、今まで「民衆」という翻訳でずっと出てきた「民」（λαος、ラオス）という言葉の複数形。詩編 2 編では、この「もろもろの民」というのは異邦人の同意語だと思われるが、ここで教会は、それを 27 節の「イスラエルのもろもろの民」というふうに変えて使っている。「聖なる僕イエスに逆らった」のは異邦人だけではなくイスラエルの民も、つまりすべての人間ということを語っている。

「ヘロデとポンティオ・ピラト」というのを詩編 2 編と結びつけると、①「王たち」の一例として「ヘロデ」、それから「指導者たち」の一例として「ポテンディオ・ピラト」が挙げられている、と考えることができる。②「地上の王たち」として「ヘロデとポンティオ・ピラト」が挙げられ、「指導者たち」というのはサンヘドリンのことだ、と考えることができる。3 章 17 節では「指導者たち」と呼ばれている。つまり、「ヘロデとポンティオ・ピラト」に代表される「王たち」と、宗教界の「指導者」サンヘドリン、こういうふう理解することができる。

28 節

このように、王たちや指導者たちはメシアに逆らったけれど、「そして、実現するよ
うにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。」

イエスの十字架、あるいはイエスへの迫害、これが神の予定しておられたことの「**実現**」であったという主張は、これまでのところ（2:23 節、3:18）でも語られてきた。

今日のところでは、その上に更に、イエスに逆らう本人たちが神の計画とは知らずに神に反抗していたという意味で、25 節「**むなしいことを企てた**」という面が力説されている。神の御子、神の聖なる僕イエスに反抗することによって、実は、神の御定めをすべて「**実現**」させる、そして神の栄光に仕えさせられていた、そういう逆説的な皮肉がここにあると、そう言いたいのであろう。

29-30 節

「主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください。どうか、御手を伸ばし聖なる僕イエスの名によって、病気がいやされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」

29 節の原文の語り出しは「**そこで今こそ、主よ**」という続き方である。主イエスへ

の「むなしい企て」、この事実から「そこで、今こそ、主よ」、わたしたちキリスト教会への「脅かしに目を留め」てくださいと、そうつながっている。

ここでは2つのことが祈願されている。一つは、「彼らの脅かしに目を留め」てください。二つ目は、「あなたの僕たちが、思い切って大胆に」というか、「あらゆる大胆さをもって……語るができるようにしてください—語ることをお与えください」という願いである。

そして、この「あらゆる大胆さをもって……語ることをお与えください」というのに30節がつながっている。「病氣」という言葉は原文にはない。

この祈りには、「わたしたちをお救いください」とか、あるいは「指導者たちがこういう間違ったことをしないように止めてさせてください」とか、そういう祈願は全くない。ただ、「彼らの脅かしに目を留め、あらゆる大胆さをもって僕たちがあなたの言葉を語ることを得させていたきたい」、こういう祈りである。しかも、「あらゆる大胆さをもってあなたの言葉を語る」ということは、「お与えください」というように、これはもう神様からの賜物として実現することだ、という自覚である。

31 節、結論

「祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。」

昔、シナイ山でイスラエルの神が顕現されシナイ契約を結ばれた時、「山全体が激しく震えた」と描かれている（出 19:18）。その時以来、イスラエルでは、見えざる神様がこの場にご臨在になるということを表すのに「地が震える」とか、その「場所が揺れ動いた」とか、こういう象徴的な表現をしてきた（イザヤ 6:4）。だから、今も彼らが祈ったその「場所が揺れ動いた」のは、神様がこの場にご臨在になり、彼らの願いを聞き届けてくださった、ということに他ない（使徒 16:26、マタイ 27:51、54、28:2）。

そこで**「皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。」**

直前に、ペトロが「聖霊に満たされて」大胆に語った時、議場の者たちは、13 節に「ペトロとヨハネの大胆な態度を」認めた。同じ言葉（παρρησίας、パルレーシアス）である。“自由にものを言う、言論を語る時の自由さ”を表す言葉。これが今日のところでも「大胆」と訳されている。あの議場で、聖霊に満たされたペトロの発言を議員たちは「大胆」だ、「本当に自由な発言だ」と認めたように、今日のところでも、教会がユダヤ教の脅かしにもかかわらず神の言葉を語り出したその「大胆さ」というものは「聖霊に満たされ」た賜物であった。

このように、キリスト教会が神の言葉を語り続ける「大胆さ」というのは、「天と地と海を……造られた」創造主の「神」、その「聖なる僕イエスの名」、言い換えれば「聖霊」という三位一体の神様の賜物として、今日まで続けられているわけである。

以上のように、幼いキリスト教会ではあるが、最初に遭遇した公の脅かし、脅迫に対して、それにも拘わらず「大胆に神の言葉を語り」続けるという勇気を与えられた。